

【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草／村野謙吉

「自由」と「秩序」は、人類の歴史的生態系を維持している矛盾的相互補完の原則である。

「自由 (liberty / freedom)」は「我」(個)の利己性を特質とし、「秩序 (order)」は「世界」(多)の規律性を本質とする。そして自由と秩序の間に、平等の理念が常に曖昧に揺れ動いている。

(8) 歴史の深層に流れる内部言語

優れた詩には表面的の意味と、その背後に秘められた様々深層の意味がある。

和国(非覇権国)の理念の意義を明示しかつ暗示している聖徳太子の「十七条憲法」は法律でもなく詩でもないが、そこに「内部言語」を聞くことが大切であると主張するのは田中健一(『聖徳太子の深層 なぜいま十七条憲法か』1989)である。

「内部言語」は「聞く」のであって「読む」のではない。

インドのヴェーダ聖典も仏教経典もシュルティ(サンスクリット語：聞かれたこと)であって、「聞く」文献である。

「『十七条憲法』というものは、これを表面的に読みますと、そこに、仏教や儒教の影響が、顕著であるように思われます。しかし、もう一步深く踏み込んで、漢字の意味体系をはなれたところから見直してみますと、驚くことに、固定された文字の意味をはなれて、仏教や儒教や陰陽思想の深層にある本質を、日本的に見事に捉え直されいているのであります。」

「内部言語を聞く」とは、利己にもとづく自己中心の知の「ワタクシ」が、「コト」の真相である「マ・コト」を解説したり解釈したりするのではない。

「仏道」より派生した「香道」においては、香を嗅ぐのではなく「聞く」のであるから聞香という。

仏道は教理の学習ではなく、仏典が暗示するモノやコトの内部からわたしに語りかけてくる「ミ・ノリ(御法)」を聞くのであるから聞法という。

すべての詩に「内部言語」が認められるということではないが、インド大乘仏教の偉大なる思索家・ナーガールジュナ(漢訳・龍樹；150～250年頃)は、仏典におけるブツダの言説の真意を理解するには、表層言説(俗諦)と深層言説(真諦)の二つの意義を了解して読まなければならないと説いた。そこで田中健一の「内部言語」はナーガールジュナの深層言説(真諦)を意図しているのだろう。

しかし深層言説(真諦)は隠された言葉ではない。ブツダ・釈尊は開かれた手のひらを示して仏説は表層言説としてだれにでも公平に開示され、しかも言説の深層の意味を悟ることを要請している。

では、内部言語・深層言説は、どのように読むのか、そして聞こえてくるのか。

田中健一は「内部言語」の読み方を示すために芭蕉の一句を取り上げる。

芭蕉(45歳)は八月十五日、「田毎の月」で有名な信州姥捨山で仲秋の名月を見て一句が生まれた(「更級日記」)。

「倂や姥ひとりなく月の友」

この句の「内部言語」を探る過程においては、通常の語彙解釈を前提として、さらにこの句を読む人の歴史観・人生経験・美意識が試される。



(「田毎の月」画像提供：千曲市)

信州姥捨山とは、歴史的にどういういわれを持った地域なのか。

面影ではなく倂（日本製の漢字）であるのはなぜか。

「ひとりなく」は「今、あたかも芭蕉の目の当たりに老婆が一人で泣いている」のか。

それとも「昔捨てられていた姥たちは今はもう一人もいない」という意味なのか。

月は、実の息子によって山に捨てられた天涯孤独の姥の友なのか、漂泊の芭蕉の友ではないのか。

姥捨山の近在に出生した田中健一は、この俳句から意表を突く声を聞く。

「老婆を背負って、そこに老婆を置き去りにして帰った若者は、たれあろう、この芭蕉の前生の姿。

これこそが、ほかならぬ芭蕉の、深層意識にゆらめく「影」であります。

この「影」が、今や老婆の倂（おもかげ）を、切に尋ね求めているのですが、老婆達は一人として、その姿を見せてはくれません。前生の罪は、いかんとも消すべくもない、そんな絶望の暗黒の中に、ふと、ささやくような声がする。見れば、いつの間にか、中秋の明月が空高くのぼって来ているではありませんか。

月の光が、実はいま聞いた「ささやき」であったのか。さしのべられていた「内部言語」の光。芭蕉は、たしかに、それを「声として」聞いたのであります。」

俳句は日本語の最短の詩形において作者の個人的心情を超えた広がりのある世界を表現する文学であるとするれば、日本語の短詩形の元をなす短歌は、長歌と俳句の媒介点において作者の心情の「マコト」を詠む文学であろうか。

令和五年を迎えて、四代にわたり平和を願う天皇の和歌である御製をあらためて拝読し、それぞれの中に、ある種の歴史の流れを感じる。「ある種の歴史の流れ」とは、天皇という特殊な地位が日本国の歴史の呼吸のごときものを感じられる立場だからだ。

明治天皇「四海兄弟」

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

大正天皇（日露戦争などの戦利品をみたとき詠まれた歌）

武夫（もののふ）のいのちにかへし品なればうれしくもまた悲しかりけり

昭和天皇

夏たけて堀のはちすの花みつつほとけの教え憶う朝かな

三代にわたる御製のそれぞれに平和を願う心が宿されていることを感じるが、それぞれの時代の息遣いを反映しているように感じられる。

世代を異にするさまざまな生活体験をもつ人々が御製を詠んで、それぞれの感慨を覚えることだろう。

明治天皇の和歌は、日本の有史以来初めて欧米列強の荒波が日本列島に押し寄せてきたことを感じさせ、

大正天皇の和歌は、有史以来始めて欧州人と実戦した和国の兵士に思いを寄せ、

昭和天皇の和歌は、未曾有の世界大戦と敗戦の熾烈な体験をされた天皇が、蓮華の花をご覧になり、穏やかな平和の世界を願いつつ、仏の教えに安らぎを覚えておられる。

令和四年は国内外で激動の年であったから、平成二十六年から令和五年まで10年の歌会始の御製をあらためて拝読し、それぞれの和歌から聞こえてくるなにかに身をゆだねる気持ちで、歴史の流れを感じつつ詠じてみた。

一般の歌人ではなく、「天皇」は世界各国の権力の中枢にある複雑な背景を持った人々と直接対面する経験をされているから、天皇が詠まれたという事実が、それぞれの和歌を詠む時に、ある種の歴史的重みを感じさせるのである。

一般の歌人の歌ではなく、天皇の和歌・御製であると意識して詠んで見ると、先に述べた詩歌における表層言説と深層言説を思い出さざると得ない。

平成二十六年歌会始 静

慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

平成二十七年歌会始 本

夕やみのせまる田に入り稔りたる稲の根本に鎌をあてがふ

平成二十八年歌会始 人

戦ひにあまたの人の失せしとふ島緑にて海に横たふ

平成二十九年歌会始 野

邯鄲（かんとん）の鳴く音（ね）聞かむと那須の野に集（つど）ひし夜（よる）をなつかしみ思ふ

平成三十年歌会始 語

語りつつあしたの苑を歩み行けば林の中にきんらんの咲く

平成三十一年歌会始 光

贈られしひまはりの種は生え揃ひ葉を広げゆく初夏の光に

上皇・継宮 明仁 昭和64年(1989年)1月7日ー平成31年(2019年)4月30日

令和二年歌会始 望

学舎（まなびや）にひびかふ子らの弾む声さやけくあれとひたすら望む

今上天皇・浩宮・徳仁 令和元年(2019年)5月1日- 在位中

令和三年歌会始 実

人々の願ひと努力が実を結び平らげき世の到るを祈る

令和四年歌会始 窓

世界との行き来難（がた）かる世はつづき窓開く日を偏（ひとへ）に願ふ

令和五年歌会始 友

コロナ禍に友と楽器を奏でうる喜び語る生徒らの笑み

かつて日本は、中国・ロシア・米国という現在の三大軍事大国と次々に戦ってしまった。

米国、中国、ロシアという世界の三大軍事大国・第二次世界大戦後の戦勝国に地政学的に囲まれた列島日本は、今後どのような命運をたどるのだろうか。



(主な在日米軍基地：在日米軍：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』)

しかも日本列島には米軍基地が配備されて中国とロシアに対峙している。

2019年3月末現在、在日米軍は、横田基地（Yokota Air Base、東京都）に司令部を置き、5万6118人のアメリカ軍人が日本に駐留している。

改めて考えれば、終戦後の日本は、平時と有事が同時に共存した異様な状況に置かれている。

そのような日本を中国、ロシア、韓国、北朝鮮は、どのように観察しているのだろうか。



西欧の二重規範の「自由」の文明に翻弄され、世界の終末時計は刻々と与えられた時間を短縮し、人々は心の奥底にぼんやりした不安を感じているのではないか。

われわれは、これから日本の伝統のしぐれてゆく後ろ姿を見つづけてゆくのだろうか。

多民族国家であるとはいえ漢人主導の多民族国家・中華人民共和国は、西欧的個人の自由よりも国家の秩序を最優先するが、有史以来初めて万里の長城を越えた世界的な経済的拡張に、米国の保守層は非常な警戒心を持って対処しようとしている。

しかし中国の海外の軍事基地は「アフリカの角」に一ヶ所のみ、ロシアはシリアに二ヶ所あるだけだ。しかし米国は世界中に数百ヶ所の軍事基地を配備している。(1)

米国は中国の Sharp Power (2) に対して敵愾心をあらわにしているようであり、同じ西洋文明のロシアには奥深い不信を抱いているが、米国の支配情念の深層は、いったい何に危機感を覚えているのだろうか。それとも何に怯えているのだろうか。

圧倒的な軍事力を誇示する米国であるが、現在、移民国家の米国民の間には米国のアイデンティティーをめぐって激しい対立と混乱が渦巻いているようだ。

米国が仮想敵国を具体化し外敵を作って米国民の混乱した国民感情をまとめるような動きが出たら大変だ。

東アジアに位置する和国・日本は、西欧の植民地支配の基本的戦略である分断統治の圧力に対して、近隣諸国、特に中国との安定した関係に最高度の外交的叡智を發揮しなければならないだろう。

日本文化は、一千年以上にわたって中国文明の余慶の下に歴史的に成立してきた。

しかし米国や中国の政治的行動の瑕疵を批判するのは良いが、政府と国民とは整理して考えるべきだ。

好悪の感情や、いわゆる専門家の共時的戦略思考に促された反・嫌“米国人”や“反・嫌中国人”の感情が、マスコミとSNSを通して日本の国民に広範に受け入れられるような状況は、日本の国益と安全保障にとって最大の不安定要因だ。

今後、日本が大震災に見舞われたり、原発の汚染水等の問題で本格的に批判を受けた場合、どう対処するのか。米国や中国からの援助や理解を拒絶するか。

今後、日本人は、改めて両国民とは多様な「未来志向の善民外交」を柔軟に促進・深化する必要がある。

現在、世界全体が内戦化したような荒海の状況下、その中に漂う日本丸は、いかなる航路を進んで行くのだろうか。

和国の文化価値に生きることの自信と誇りをもつ日本人であるのなら、聖徳太子の志を受け継ぐ伝教大師最澄の「愚と狂の自覚」に思いをよせ、日本人自身の中にある負の要素を自省する必要がある。これは自虐ではなく、仏教の問題でもなく、仏教を超えた、特にすべての宗教人における「ひと」としての内省である。

現在、世界は、表層言説の背後に埋め込まれた偽りの深層言説に導かれているのだろうか。それとも現在我々が見ている歴史の展開自体が幻想の黙示録なのだろうか。

西欧の産業革命以来、大量生産技術と、近年は情報技術が異常に発達してしまった。そして世界は、少数による金融支配によって、各国の政府や軍さえもが民営化されているがごとくに席卷されている状況である。

歴代天皇の御製に流れている、十七条憲法に秘められた「深層言説としての和の心」に希望を託して、快晴の冬空を見上げながら、和国の行く末を思うことである。

碧空を貫く冬の陽光に樹々の緑の光る朝なり

-
- (1) MELVIN GOODMAN: The New Cold War Could Be Worse (COUNTERPUNCH: JANUARY 6, 2023)
 - (2) HOOVER INSTITUTE|Stanford University: China's Gobar Sharp Power Project. China's rapid accumulation and projection of power on the world stage confronts the world's democracies and open societies with serious challenges. Beyond the breathtaking modernization and enlargement

of the People's Liberation Army, and its increasingly aggressive and expansionist deployment in the Indo-Pacific region, there is the more subtle—but by no means benign— expansion of China's "sharp power."

(2023/02/18 F 記)

村野謙吉: 仏教・日本文化・G.オーウェル研究家; 翻訳家; コラムニスト (Mainichi Daily News (1978-1983) など)。
訳書: ヴィンセント・ステイアー 『プリンティングデザイン・アンド・レイアウト: 欧文書体とレイアウトの常識』 など。